

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、3月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（3月）

令和 3 年 2 月 26 日
愛 媛 県

- 1 気象予報（高松地方气象台）
1 か月予報 2 月 18 日発表（2 月 20 日から 3 月 19 日）

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 30 並 40 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み

< 予報のポイント >

向こう 1 か月の気温は、暖かい空気の覆われやすいため高いでしょう。特に、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

向こう 1 か月の日照時間は、高気圧に覆われやすいため、平年並か多いでしょう。

2 病害虫の発生予想

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2 月上旬に伊予柑を対象に越冬病斑量を調査した結果、県全体では発生園地率及び発病度とも平年並の発生である。地域別の発生では東・中予でやや多、南予でやや少である（表 1）。

(イ) 甘平では発生園地率及び発病度ともに高いが、愛媛果試第 28 号ではやや少の発生である（表 2）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、越冬病斑中での菌の増殖に助長的と考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発芽期までに残存する発病枝・葉を丁寧に除去し、園地の病原菌密度を下げる。

(イ) 強風により枝葉が付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 春先感染防止対策として、発芽前の薬剤防除を徹底する。ただし、IC ボルドー 66D は、マシン油乳剤との散布間隔を 14 日以上あけ樹勢の弱い樹では使用しない。

(エ) 気温が高い見込みであることから、中晩柑類では発芽が早まる可能性があるので散布時の発芽状態に留意する。

表 1 伊予柑におけるかんきつかいよう病の越冬病斑量調査結果

地域	調査園地数	発生園地率 (%)		発病度	
		R3.2	平年	R3.2	平年
東予	46	50.0	37.3	4.1	2.7
中予	91	44.0	35.0	4.7	2.5
南予	43	60.5	73.9	5.5	8.4
県全体	180	49.4	48.6	4.7	4.6

表 2 品種別のかんきつかいよう病の越冬病斑量調査結果

品種	調査園地数	発生園地率 (%)		発病度	
		R3.2	平年 ¹⁾	R3.2	平年 ¹⁾
甘平	78	76.9	66.2	19.7	17.4
愛媛果試第 28 号	54	46.3	73.6	7.3	13.3

1) 平年：H28～R2 年までの 5 年間の平均値

(2) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的と考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 12～1月にマシン油乳剤を散布していない園地では、発芽までに散布するが、12～3月の冬期に2度散布しないよう注意する。また、IC ボルドー66D散布予定園では、マシン油乳剤を先に散布し、14日以上間隔をあけてからIC ボルドー66Dを散布する。

(イ) やや樹勢が低下した樹では、高度精製マシン油乳剤(97%)を使用する。

(ウ) 気温が高い見込みであることから、中晩柑類では発芽が早まる可能性があるので散布時の発芽状態に留意する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査(品種：ヘイワード、18園地)では、枝幹部からの赤褐色の樹液漏出は確認していないが、黄色系品種では一部圃場で漏出を確認している。

(イ) 昨年12月下旬から1月にかけての低温により、凍害による損傷があると考えられる。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされていることから、病徴発現が早くなるものと予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) 枝幹や枝の切り口等から樹液の漏出や枯死枝の発生が見込まれるため、園地の見回りにより初発を見逃さない。

(イ) 発生確認後は周辺樹への拡散防止のため、発病部の早期除去を徹底する。伐採基準は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(ウ) 結果母枝の棚付けは確実にを行い、園地の防風対策を強化するなどして、病原菌の侵入口となる枝のすり傷を防止する。

(エ) 管理器具は園地ごとの専用にして、エタノール等で消毒しながら使用する。

(オ) 発芽・展葉期の感染予防としてIC ボルドー66D 50倍、コサイド3000 2,000倍を発芽前に必ず散布する。

野菜

(1) ベと病(冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、1圃場で多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。

(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

(2) ハダニ類(冬春いちご、冬春なす)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 2月上中旬の調査では、冬春いちごが並、冬春なすでは1圃場であるが多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされていることから、発生にやや助長的と考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の上昇に伴い密度が増加しやすくなるため、圃場観察して早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。

(3) アブラムシ類(冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 2月中旬の調査では、やや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされていることから、発生にやや助長的と考えられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察して早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。
- (イ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。
- (4) コナジラミ類 (冬春トマト、冬春なす、冬春いちご)
(令和3年1月21日付け 病害虫防除技術情報 (第5号) 参照)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月上中旬の調査では、オンシツコナジラミが冬春いちごで並、タバココナジラミが冬春いちご、冬春なすで多、冬春トマトで並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生にやや助長的と考えられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
- (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避けローテーション散布する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) タバココナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介するので発生に注意する。
- (5) アザミウマ類 (冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月上中旬の調査では、やや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生にやや助長的と考えられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 主に花や果実に寄生するので発生が認められたら早めに薬剤散布を行う。
- (イ) 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (6) ミナミキイロアザミウマ (冬春きゅうり、冬春なす)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月上中旬の調査では、冬春きゅうりで並、冬春なすで多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生にやや助長的と考えられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
- (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避けローテーション散布する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) 本虫はメロン黄化えそ病を媒介するので発生に注意する。
- (7) 灰色かび病 (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査では、冬春トマト及び冬春きゅうりで並、冬春いちごでやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的と考えられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 日中は可能な限り換気を行い、夜間は暖房温度を上げてハウス内の多湿を防止する。
- (イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 発病果や枯死茎葉は感染源となるので早めに除去する。
- (エ) 発病初期の防除に努める。同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (8) 白色疫病 (たまねぎ)
- ア 予報の内容 発生量：やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月上中旬の定点調査及び県下全域の普通期栽培を対象に実施した調査では発生は未確認であるが (表3)、早生品種の一部圃場で発生を確認している。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くと考えられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を十分行い早期発見に努める。
- (イ) 排水不良の圃場で発生が多いため、降雨後の排水に努める。
- (ウ) 発病葉や枯死した葉は感染源となるので、適切に処分する。
- (エ) 本病原菌は水媒伝染するため降雨前後の防除が重要となる。
- (オ) 発病初期の防除に努め、薬剤は同一系統の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (カ) たまねぎの葉は薬剤の付着性が悪いため、展着剤を必ず加用し丁寧に散布する。

表3 たまねぎ（普通期）における白色疫病発生調査結果

地域	調査圃場数	発生圃場数	発生圃場率 (%)		平均発病株率 (%)	
			R3.2	R2.2	R3.2	R2.2
東予	36	0	0	0	0	0
中予	35	0	0	15.0	0	4.4
南予	23	0	0	0	0	0
県全体	94	0	0	4.8	0	1.4

(9) ベと病（たまねぎ）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 2月上中旬の定点調査では、発生は未確認である。
- (イ) 県下全域の普通期栽培を対象に調査した結果、南予で発生が認められたが昨年の同時期の調査に比べ発生圃場率は低い（表4）。なお、早生品種では中・南予の一部圃場で発生を確認している。
- (ウ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くと考えられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 越年罹病株（葉の黄化・色あせ、草丈が小さく葉身にビロード状の灰褐色の分生子(粉)が付着した株）は見つけ次第早期に抜き取り処分する。
- (イ) 早生種では、球の肥大期になると葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察をして発病初期からの防除を行う。
- (ウ) 気温が15℃以上で曇雨天が続くと多発しやすいので防除が手遅れにならないよう注意する。

表4 たまねぎ（普通期）におけるべと病発生調査結果

地域	調査圃場数	発生圃場数	発生圃場率 (%)		平均発病株率 (%)	
			R3.2	R2.2	R3.2	R2.2
東予	36	0	0	13.6	0	0.8
中予	35	0	0	5.0	0	0.1
南予	23	2	8.7	10.0	1.8	0.1
県全体	94	2	2.1	9.7	0.5	0.4

【病害虫発生予察情報】

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所
ホームページアドレスは

<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。